実践事例　中学校１年

国語科で活用する
～友情、信頼～

防府市立牟礼中学校　　田中　雅枝

1　本場面におけるポイント

- 読み取った登場人物の心情や考え方をもとに、自分のものの見方・考え方を広げ、作品への理解を深める。
- 自分の意見を発表したり、「私たちの道徳」に記入したりする活動を通して、表現力や伝え合う力を育てる。
- 保護者に「私たちの道徳」への記入を促すことにより、教科や道徳の授業・学習内容に対する関心を高める。

2　授業の実際

１　題材名　「そこに僕はいた」 辻　仁成（出典 東京書籍 新しい国語１）

２　ねらい

場面の展開や登場人物の心情の変化に着目して、作品を読み味わうとともに、互いに理解を深めようとする態度がよりよい人間関係を築いていくことに気付く。

３　指導計画と「私たちの道徳」活用の実際

（１）「そこに僕はいた」を読んで、あらすじを捉え、初発の感想を発表する（１時間）。

（２）場面の展開に沿って、主人公の「僕」と片足が義足の友達「あーちゃん」の気持ちや、二人の関係の変化を捉える（１時間）。

（３）「あーちゃん」が義足になった理由を「僕」に語った場面での二人の心情について、グループで話し合い、発表する。さらに、「私たちの道徳」のP.60「励まし合い高め合える生涯の友を」を読み、P.61「あなたにとって友達とはどんな存在か考えてみよう。」の問いについて考え、記入する（１時間）。

教師：「あーちゃん」が義足になった理由を語り、義足を見せてくれた後、「僕」はどのようなことを思っていたのでしょうか。また「あーちゃん」自身はどんな気持ちでいたのでしょうか。

生徒：〈「僕」の気持ち〉
- 「あーちゃん」の過去を知ってショックだっただろう。
- 自分だったら子猫を助けていただろうか。「あーちゃん」は優しいし勇気がある。
- 「あーちゃん」の今までの苦労や心の痛みを思うと悲しくなった。
- 「あーちゃん」の人に頼ろうとしないたくましさはすごい。
- 心を開いてくれてうれしい。もっと仲良くなりたい。

〈「あーちゃん」の気持ち〉
- 過去のことを話せて少し楽になった。
- やっと義足のことを話せる友達ができた。
- 「僕」は、同情ではなく、対等に自然に接してくれている。
- 話したことで、これからもっと仲良くなれるのではないか。

□　指導上の留意点・支援・「私たちの道徳」活用のポイント等

作品には、「僕」が目を負傷することで「あーちゃん」への見方が変化していく場面がある。それらを手がかりに、生徒は、異なる個性をもった人と人とがかかわり合い、理解を深め、心を通わせていくさまを読み取ることができる。

国語科の授業で、相互理解や友情の大切さについて考えた後、「私たちの道徳」を活用することで、自分自身の友達関係について見直す機会としたい。作品のなかに含まれる道徳的価値を、より自分のものとして捉え直すとともに、作品世界への感動を深めることができると思われる。

（４）P.61の問いについて、各自が記入した部分を家族に見せて、意見を聞くとともに、P.63「家族や人生の先輩にそれぞれの考える友情について話を聞いてみよう。」の部分に記入してもらう。

□　指導上の留意点・支援・「私たちの道徳」活用のポイント等

「私たちの道徳」を持ち帰らせ、生徒の記入事項をもとに家族で話し合わせることで、学校での教育活動への保護者の関心を高め、学習内容を共有することができると考える。また、親の視点からの気付き・意見が加わることで、生徒の学びに広がりが生まれることが期待できる。

3　実践を振り返って

「あなたにとって友達とは？」の問いに対し、「一緒にいて楽しい人」、「気が合う人」と答えた生徒もいたが、「互いに信頼できる人」、「困ったときに相談にのってくれる人」、「建前ではなく、お互い思っていることがきちんと言い合える人」、「協力し合うが、時にはライバルにもなれる人」、「考え方が違ってもそれを理解し合える人」など、作品の登場人物への理解から、友達や友情に対する見方を広げたことがうかがえる意見も多くみられた。

また、保護者の記述の中には、「あなたの身になって、聞きたくないような厳しいことも言ってくれる人」、「一緒にいなくても、常に心の支えになってくれる存在」といった、人生の先輩ならではの捉え方があったり、「普段しないような意見交換が親子でできてとてもよかった。」という感想や、両親それぞれの意見を書き留めたものがあったりと、家庭での学習が深まったと思われる反応が得られた。

道徳的価値観の指導後の国語科の学習指導では、教科指導の効果が十分に得られないこともあるが、国語科で叙述に基づく人間理解や主題の読み取りを十分進めた後、それをもとに、生徒が自分の生活を見直し、ものの見方・考え方を深めていくことは、自然な流れであると同時にとても有効である。教科と道徳、教室と家庭とをつなぐものとして、「私たちの道徳」を活用することに今後も取り組んでいきたい。